

第 46 回卒業証書授与式式辞

「さよならは別れの言葉じゃなくて 再び会うまでの遠い約束」(『セーラー服と機関銃』薬師丸ひろ子)

本日は、感染症による制限の中、ご来賓の皆様、そして保護者の皆様をお迎えし、このように盛大に第四十六回卒業証書授与式を挙行できますことを大変光栄に存じます。ご臨席を賜り、誠にありがとうございます。また、保護者の皆様、お子様のご卒業誠にありがとうございます。最初に卒業生の皆さんには、謝らなければならない。感染症の拡大により、様々な活動に制限が加えられた。中止もあった。延期もあった。入学式は入学の集いだった。沖縄には連れて行ってやれなかった。かけがえのない高校三年間がマスクに支配されてしまった。申し訳ない。

一方、大切なことに気付く機会を得た。今まで当たり前だと思っていた事は、実はそうではなく、世の中に当たり前のことなど一つもなかったということだ。おかげで、私たちは、その一つひとつに感謝することができるようになった。今年度の体育祭や文化祭を一定の規制の下でも心から楽しみ、盛り上げ、みんなが笑顔になった。誰一人として眉を顰める人がいなかったのは、この第四十六回卒業生の皆さんがその空気を作ってくれたからだ。また、「心配から信頼へ」をもとにした様々なアップデートに対し、生徒会を中心として積極的に推進してくれた。ありがとう。そして「ただいま」「おかえり」が言い合えることも当たり前ではなかった。四月二十四日、二年生の中山彩花さんは、交通事故によって「ただいま」を言えなくなった。

世の中は 空しきものと知る時し いよよますます悲しかりけり 大伴旅人

彼女は身をもって命の重さを教えてくれた。命があれば、失敗も経験の内だと気づかせてくれたのも、彼女だ。四十六回生では三浦かなでさんも交通事故で一時重体になった。一緒に卒業させてあげたかったが、その後遺症で残念ながら転学せざるを得なかった。「ただいま」「おかえり」が言い合えることは実は奇跡なのだということに気付かせてくれた。過去は消せないが、あの時友人を思って涙し、心を揺さぶられた分、大切なことをしっかりと胸に刻み付けることができた。姫路文学館の館長である藤原正彦氏は、著書の中で「無数のパリエーションを持つ体験を重ね、惻隠、孤独、懐かしさ、別れの悲しみ、寂寥、憂愁、もののあわれなど深い情緒を有するに至る。大事なことはこれら情緒がすべて、人間が有限な時間の後に朽ち果てる、という絶対的な宿命に起因していることだ。人間に死がないのなら、失恋も失意も別れの悲しみもほぼなくなる。』(『日本人の真価』)と述べる。映画アバター・ウェイ・オブ・ウォーターにも「命は預かっているもの。いつかは返さなければならない。」というセリフがある。いつ返さなければならないかは、誰にもわからない。だからこそ、一日一日を丁寧に生きることが大切なのだ。命は天から一人ひとりが預かっているものだ。ならば、預かった時よりも輝かせてお返しする。その磨き方はそれぞれで、正解はない。間違ったら磨きなおせばよい。磨く過程こそが人生そのものだからだ。一人ひとりには、天から預かる命だけではなく、天から与えられた使命も必ずある。その使命を探しつつ、君が人生の中で出会うヒト・モノ・コトで君という果実を実らせる。どんな実になるかは誰にもわからない。高を括るな。甘いイチゴになるか、苦いピーマンになるか、酸っぱいレモンになるか、辛い唐辛子になるか、誰にもわからない。暴風になぎ倒されるかもしれない。動物に食べられてしまうかもしれない。それでも君の人生の果実を実らせられるよう、懸命に踏ん張ってみる。そうして実らせた実は、君だけのオリジナルの果実になる。懸命に踏ん張っている姿は、きっと誰かが見ている。そしてその果実は、きっと誰かの役に立つ。そう信じよう。

YOASOBIの『群青』には、教えられることが多かった。誰もが感じる悔しさ、情けなさ、苦しさ、痛み、不安。「自信がないから」何度も何度もやってみる。そして、そうして「積み上げてきたものが武器にな」り、そうやって「青い光」を見つけ、「かけがえのない僕」に成長する。

そして、彼らの『祝福』には次のように言う。

「君の世界だ 君の未来だ どんな物語にもできる
これは君の人生(誰のものでもない) それは答えなんてない(自分で選ぶ道)
逃げずに進んだことできっと 掴めるものがたくさんあるよ
この星に生まれたこと この世界で生き続けること
その全てを愛せるように 目一杯の祝福を君に」
第四十六回卒業生の皆さん、改めてご卒業おめでとう。

保護者の皆様、本日より皆様をお返しいたします。母親は子どもが何グラムで生まれてきたかを覚えていいます。手のひらに乗るくらい小さく産まれ、よく眠り、よく泣き、よく笑い、いろいろ心配させた子どもたちが十八歳で今や成人です。彼らは皆素直で、明るく、挨拶もでき、ご家庭でしっかり育てていただいたことがよくわかりました。我々は、彼らが社会人として立派に生きてゆけるよう、挨拶日本一の高校、遅刻ゼロの高校を目指す中で、ルールやマナーを守る姿勢やTPOを考える姿勢を育んでまいりました。そして彼らは命の意味、お互いに信頼することの大切さを理解してくれました。その上で、保護者の皆様は、広い心で我々を見守ってくださいました。改めてお礼申し上げます。そして、挨拶日本一を目指す姫路別所高校の卒業生なのだから、今日は、ここまで育てていただいた感謝の気持ちを今日は照れずに改めて直接伝えてほしい。

原田マハさんの小説『雪の気配』に「人生、甘くない。苦しい辛い酸っぱいし、けっこうとんでもない。でも、そういう味をちょっとずつブレンドするからこそ、美味しくなるのよね。」という表現がある。人生は、誰もが初心者で一度きりだ。何が正解かはわからない。その時その時の最善だと思う方向に、とにかく一歩踏み出してみる。アメリカの黒人指導者キング牧師は述べた。

「Take the first step in faith. You don't have to see the whole staircase, just take the first step.

疑わずに最初の一段を登りなさい。階段のすべてが見えなくてもいい。とにかく最初の一歩を踏み出すんだ。」心理学者の河合隼雄氏もこう言う。「やってみないと物事はわからない。それに駄目だったとしても、もともとなのだ。」ただし、正しい選択をするためには、生涯を通じて学び続け、経験値をあげていくことが必要だ。一歩踏み出せば、ちょっと景色が変わり、行先のヒントが見えるかもしれない。下ばかり見ていては美しい虹は見えない。一歩踏み出せば、方向転換も容易だ。君たちにはその時間もパワーもある。

先述の藤原正彦氏は「これからがこれまでを変える」と言う。変えることも、消すこともできない「これまで」は、「これから」の生き方次第で、その意味を大きく変えることになるという意味だ。過去にとらわれず前を向く。大切なのはこれからだ。もう一つ「丁寧に生きる」ことを忘れないでほしい。誠実に挨拶し、丁寧に時間を守る。誠実の誠の字は「言うを成す」と書く。つまり言ったことは必ずするということだ。自分にも相手にも誠実に向き合えば、これから出会うヒト・モノ・コトは必ず自分に味方してくれる。とにかく一歩踏み出せ。Just take the first step. そして、Keep on trying. 挑戦し続けろ。

フィギュアスケートの羽生結弦さんは言う。「明日の自分が今日の自分を見た時に、胸を張っていられるように、これからも過ごしていきたい。」誠実に丁寧に生きる意味がそこにある。

最後に、卒業生の皆さんの今後の人生に幸多かれと願うとともに、在校生の今後のますますの健闘を期待し、ご参列のすべての皆様の弥栄のご多幸を祈念して式辞といたします。

「さよならは別れの言葉じゃない それぞれの夢へと僕らをつなぐエール
いつかまためぐり逢うその時まで 忘れはしない誇りよ 友よ 空へ」(『YELL』いきものがかり) さようなら

We keep on trying. 「挨拶日本一の高校・遅刻ゼロの高校」に私たちはなる。 文責：姫路別所高等学校校長 篠原 歩